



1999年12月20日

# 日本応用心理学会 ニュースレター

—— コミュニケーションの広場 ——

No.1

## 応用心理学の課題と展望

日本応用心理学会 会長 坂野 登

応用心理学とは何かと会員に問うた場合、各自の専門領域との関わりから様々な回答が予想される。このことは応用心理学を、心理学的知見を現実の(実践的)諸問題に適用する学問と定義した場合、応用心理学と重なり合う心理学の領域が多々でることからも容易に理解できることである。しかし現在、応用心理学においては、心理学の基礎的研究の方法や成果がそのまま適用される(applied)わけではないという点に関しては、意見はある程度一致しているのではないだろうか。とはいっても、対象とする領域が明確な発達、教育、臨床、社会心理学などの領域では、独自の体系の構築が比較的はつきりしていて、そのためか応用心理学とは一線を画しているようである。他方応用心理学では、対象とする領域の多くを包含するような独自の体系というものとは存在していない。

それでは応用心理学は、心理学の他の領域と違ったような特徴をもつのであろうか。まず、目的とされている対象領域を明確にして、そこでどのような実践的課題が問われているかを明らかにすることから出発することが求められている。そこでは同時に、研究者の行為の社会的責任が他の領域以上に問われていることになる。次いで問題とされる領域ではどのような固有の体系が構築されていて、それに対してはどのような心理学的方法があり得るかを

検討しなければならない。ここでの方法の検討は、対象領域が比較的限定されている他の心理学の領域に比べて多様であり、また多次元的な方法を要することが多い。それだけアプローチの方法の広さと深さが応用心理学者に要求されている。つまり他の領域に比べて、よりマルチな眼を持つことが要請されているといえよう。

応用心理学者は、当該の領域からの現実的な要請がどこまで妥当なものであるかを見極める眼を持たなければならない。大会での討論の中では、応用心理学の果たす役割についての過大な期待からくる、問題のとらえ方の甘さが指摘されている。さらには、応用心理学の方法の限界も認識しなければならないだろう。また応用心理学者は、研究の対象となる人々をより具体的に把握する方法を模索しなければならないだろう。対象者を、実験群と対照群と比較させるだけでは不十分な場合が多い。個人レベルにまで言及できる方法が必要とされる。

すべての心理学的研究は応用心理学に通じる。これは応用心理学の強みであると同時に、独自性を発揮できない弱みであることを私たちは認識しなければならない。このことの認識が、本学会の充実と拡大への道に通じるものではないだろうか。

(神戸親和女子大学教授)

### 目

応用心理学の課題と展望	坂野 登	1
応用心理学の課題と展望	稲毛教子	2
日本応用心理学会学会賞、奨励賞		2
日本応用心理学会の組織	荻野七重	2
応用心理学の国際交流	長塚康弘	3
応用心理学と関連周辺領域	神作 博	4

### 次

看護学と応用心理学	内海 滉	4
これからの応用心理学	藤田主一	5
応用心理士事務局より	岡村一成	6
お知らせ		6
事務局より	荻野七重	6

## 応用心理学の課題と展望

稲毛 教子

テーマをみて、はたと困惑した。とても私の任には負えない。雑感を書かせていただくことで責任を果たしたい。

今世紀も余すところ秒読みの段階に入ったかの印象をもつこのごろである。そこで、今世紀を振り返ってみると、輝かしい進歩・発展が確実にあるのだが、その大きな波にのみ込まれそうな不安感が世紀末のそれと相俟って襲ってきている。

産業革命にあげ、機械・物質文明の恩恵を浴して人間は至福の時代を迎えた筈なのに、なぜか、いま、その人間がそれらに振りまわされ、疲れはて喘いでいる。

学問はおよそ時代と無縁のものではない。ましてや、応用分野ともなると、その観は一層強い。心理学とて同様である。応用心理学が今世紀の発展におよばずながら寄与したことは、先達の研究業績を辿ってみれば明らかである。応用心理学が、人間の精神・心・魂を主軸に捉え、めざましく発展した文明に真摯に対峙してきたにも拘らず、いま機械文明がもたらしたとらえどころのない大きな波にのみ込まれようとし、時にその力をつきつけられているような問題が相次ぎ、その対応は後追いでしかないことが多

い。このような事態を真摯に受けとめ、学問のありようを再構築せざるを得ない。

学問が象牙の塔に籠もり、時代と無縁で独り在ることが許されないほど時代の変化は急激であるとき、現実を直視し、予見・先見性をもったの応用心理学が求められている。

また、学問とは真理の研究であることは自明のことであり、深く追求することが学問家の使命としても、時間軸を無視することが成立しないいま、学際的な、そして、それらとのバランスを求めなければ、結果して人間に受け入れられないであろう。居心地のよい、いや、窮屈なタコ壺を出る勇気・発想の転換をもたねばと反省しきりである。

さらに、ある特定の対象（ある mater, material）に気をとられることなく、あくまでも、人間をしつかり視座に捉え、人間とそれらとの調和を考えての進歩・発展でなければならない。

今世紀は発展に次ぐ発展をとげてきたが、人間発達には、上昇過程と下降過程とがある。また、normal なとき・ものを abnormal, disorder に苦しむとき・ものがある。どの分野に焦点をあてようと、常に全体を視野におさめ、おしなべて、すべての人間にとっての well being への応用心理学でなければと考えている。

（東京国際大学教授）

## 応用心理学会第3回学会賞・奨励賞

去る9月11日に、東京国際大学で開催された第66回大会の総会において学会賞と奨励賞が授与されました。

学会賞 向井希宏氏（中京大学文学部助教授）

規制（コンベアー）作業、組立作業、キーボード作業等における作業者の行動特性や技能習熟に関する実験的研究や、中高齢者の作業遂行行動等に関する研究が、健康的労働への、また現場教育の基礎的応用研究

として高く評価されました。

奨励賞 申 紅仙氏（立教大学大学院文学研究科博士後期課程）

「潜在的利き性からみた退避行動」（1998 応用心理学研究 24号1-8）。これまでの先行研究を Virtual Reality 装置を用い、新しい切り口から実験的研究を開始し、緊急時の退避行動を「潜在的利き性」という観点から考察する等、研究の持つ独創性が高く評価されました。

## 日本応用心理学会の組織と運営

事務局長 荻野 七重

日本応用心理学会は現在、約1,060名の会員と4

賛助会員から成り立っています。本学会は会則に記されていますように、次の大会主催校の委員長が会長となり、その次の大会の委員長が副会長となります。このように会長、副会長が1年で交代していく

制度は本学会の特徴といえます。

本学会には、約60名の委員からなる運営委員会と、その中から選出された約25名の委員からなる常任運営委員会という組織があります。会長、副会長、事務局長を含むこの常任運営委員会が中心となって学会の運営が図られています。

常任運営委員会には、機関誌編集委員会、認定「応用心理士」認定審査委員会、学会史編集委員会、学会賞・奨励賞選考委員会、そして今年度から新たに海外交流委員会、シンポジウム委員会、広報委員会、研修委員会が加わり、これら8つの委員会がそれぞれに活動しています。常任運営委員会は原則として月に一回の会合を持ち、各委員会からの提案や新入会員の資格審査、事務局から出された諸問題を審議しています。

年に1回開催される大会は、主催校の大会準備委員会が企画から実行まで独自に行います。この大会のときに、本学会にとって重要な会議である年1回の運営委員会と会員総会が開かれます。会則の変更

に関わるような重要事項や予算決算、大会主催校の決定等は、これらの会の承認を必要とします。

学会運営の基盤を支えているのが学会事務局です。現在は事務局長、幹事、事務局員2名で学会の運営全体に関わりながら、会員の方々の直接の窓口として、また、対外的な窓口としてさまざまな業務を行っています。認定「応用心理士」については、特別に認定「応用心理士」事務局が設けられ、申請の受け付けから認定証の発行までの諸々の業務を行なっています。

今年の3月に発行された学会名簿をご覧いただくと、会則、組織、役員等をお知りになることができます。また、本学会では、機関誌「応用心理学研究」の最後に、事務局だよりとして、議事録、予算、決算、規則・規程等が掲載されています。これらを通じて、多くの会員の方が、この学会に一層の関心をもっていただけるようになることを期待しております。

(白梅学園短期大学教授)

## 応用心理学会の国際交流委員会

### 国際交流委員会 委員長 長塚 康弘

本学会の会誌資料編のIX「日本応用心理学会の対外的活動」の(1)「学会の国際交流」の欄をみると、「国際応用心理学会第11回大会（パリ、1953年）に日本人として初めて大脇（東北大学）が出席した」と記され、大脇教授に続いて、12回大会には広島大学の古賀教授が、13回大会には宮城教授が、そして14回（コペンハーゲン）の大会には7人が参加したことが記されています。

日本応用心理学会の国際交流活動はこのようにして始められ、1968年のアムステルダム大会頃までは本学会からの出席者・発表者があったようです。その後の20数年間は本学会としての組織的な国際交流活動は行われず、国際応用心理学会（IAAP）の個人加入の原則に従って、本学会会員個人による国際交流活動が行われてきたようです。

しかし最近では、'94年のマドリード、昨年（'98年）のサンフランシスコ大会には、共に多数の会員の参加があり、次回2002年大会（シンガポール）には日本応用心理学会としての関与・交流活動を期待

する声がこれまでの参加経験者の中から次第に広がって参りました。

このような動向を基盤にして国際交流委員会の設置が常任運営委員会に提案され、審議の結果本年7月に同委員会が発足しました。委員は垣本、長塚、福原、正田、村井の各常任運営委員（五十音順）で、長塚が委員長に指名されました。

これまでの2回の会議では、今後の本委員会および学会としての国際交流活動の進め方を主テーマとする意見交換が行われ、当面の活動予定が次のようにとりまとめられました。

1. 本会会員の国際応用心理学会への入会を勧誘する。
2. 第25回国際応用心理学会（シンガポール）関係
  - (1) 同大会への会員の出席と研究発表を勧める。
  - (2) 本学会としてのシンポジウムを計画し、提案する。
3. 国際的研究交流活動を計画する。本学会主催の国際シンポジウム、講演会、共同研究等を行う。その方法として、例えば、シンガポールでの上記学会の機会に、同学会への出席者

を東京等に招請し、シンポジウムまたは講演会を開催するよう計画立案に着手する。

以上のうち、委員会の検討状況につきましては、第66回大会（東京国際大学）の運営委員会および総会において報告いたしました。国際応用心理学会へ

のご入会、参加・発表等につきまして、会員の皆様のご協力をいただきたく、よろしくお願いいたします。併せて、本委員会へのご要望等をお寄せ下さいますようお願いいたします。

(新潟大学教授)

## 応用心理学と関連周辺領域

### 神作 博

応用心理学の一部ならびにその周辺に位置するとされる諸分野、すなわち、照明・色彩、人間工学、交通、航空・宇宙環境、情報科学、福祉・犯罪等について従来よりの経緯を略記し、あわせて最近のトピックス、最新の話題を展望してみることにする。

#### 1 照明・色彩の分野

色彩については色彩心理学と称せられているものが従来から存在しており、色彩と心理との関係は種々の接点で検討・追究されてきており、その成果の社会への還元も多い。1997年春には国際色彩学会(AIC)が京都で開催され、多数の出席者をえた。さらに、日本色彩学会創立50周年記念として新編色彩科学ハンドブック(改訂版)の刊行も行われた。いっぽう、照明においても人的要因を考慮に入れるべき必要性が以前から叫ばれてきており、特に、最近では人間の生理・心理を軸に照明諸条件のシステムの整備、照明環境の構築が行われつつある。1997年秋には名古屋においてルックスパシフィカ(Lux Pacifica; 環太平洋照明会議)が開催された。

色彩では最近特に個性発揮との関係、環境作りとの関係に色彩心理が重視されてきている。この情勢の凝集化ともいべきか「カラーコーディネーター」等の資格獲得を目ざす人が多く、その動きも活発で

ある。「カラーセラピー」などと銘打った書物も何冊か刊行されており、色を用いた心理診断(査定)、精神的健康保持、さらには心理的治療にまでもとの動きも垣間見られ、これらに対する心理学の専門家の鋭い関心が寄せられつつある。色の好みの国際比較を集大成した刊行書も発刊された。

照明と見え方の関係の基本を明らかにした印東太郎・河合悟両教授の研究は古くから著明なものであり、この成果が日本工業規格(JIS; Japanese Industrial Standard)の「照度基準」の中核をなし、広く各種の作業環境、学校等の照明環境、家庭等の照明などに活かされてきている。その後は飛行安全のための航空照明、道路・トンネル・橋梁照明、港湾および海上安全設備の照明化などに関した研究とその成果の活用がなされてきている。

最近ではオフィス・住宅の快適照明の活用方式についての研究、不登校・出勤拒否の人の「心理的刷新」をはからんとする「活性化の照明」も検討されはじめ、また、高齢者・障害者などの行動や生活を支援する福祉照明へも視線が投げかけられてきている。

照明の心理理解も含まれた照明技術の普及と教育のため、通信教育方式による「照明コンサルタント」ならびに「照明士」の講座も開設され、資格付与も行われてきている。この状況はNHKの「オトナの試験」の番組でも取り上げられてきている。

(中京大学教授)

## 看護学と応用心理学

### 内海 混

日本応用心理学会第66回大会の御成功をお慶び申し上げます。稲毛先生をはじめとする会場主催校の各位の御尽力に対し衷心より感謝を捧げるものです。当日は天気にも恵まれ、各会場は手際よく運営され、あらゆる演題を十分に満喫させていただきました。とくに、看護学の関係で出題いたしました多くの演

題に対する暖かいご配慮には幾重にも御礼申し上げます。専門の心理学者各位より戴いた懇切丁寧なご指導を生涯忘れ得ぬ示唆として今後の研究の戒めとする心算です。とりわけ、リサーチデザインが問われる問題もあり、その論議は極めて有意義でありました。シュミレーションによる教育評価などの研究には未だに慣習的な標準化もあり、更なるご指導をお願いする次第です。

大会第2日目にはワークショップ「応用心理学は

看護研究の手法となるか」を盛會裡に行うことが出来たことはひとえにご参加戴いた各位のご協力の賜物と存じ、この紙上を借りて重ねて厚く御礼申し上げます。企画側の松永氏・桐生氏によれば、看護研究は未だ看護学生や看護教育に関するものにとどまり十分に心理学を生かしているとは言い難く、更に、看護研究における応用心理学の可能性を模索したいとしていました。

ある病原体に対して抗生物質を投与するのが医学であるならば、看護学では、患者さんの着物・履き物・案内あるいは病院の看板の出し方まで研究するのがその範囲に含まれると考えている筆者にとって、看護学こそまさに心理学の応用の最たる所であると思っていました。「応用心理学」の専門外の筆者にとっては、「応用」とは応用物理学や応用数学のようにその学の応用であれば何でもよいと気楽に考えていました。心身医学などはその中心のテーマのように思い幾たびか演題を出させて戴いたりもした。しかしながら、いまここで論ずれば、筆者は

応用天文学を航海術とは考えない。あくまで原子物理学の基礎であらねばならぬことを言い添えたい。指紋の研究によって犯人を検挙することが、解剖学の応用とは思わない。

応用細菌学では酒造をやり、応用言語学で英会話をするのが当今の流行ではあるが、応用の学は必ずその学の本質にまで遡らなければならぬものと考えます。その意味において、松下氏・花島氏らの病院管理あるいは誤治療等の問題においてよき医療を育てるべき学的法則性とその体系とを提示されています。心理学ご専門の花沢氏も永年月にわたり看護心理研究会のレポトリィをもち心理劇やカウンセリングを講じ、日本母性衛生学会などでは20-25%の研究を心理学関係が占める現状にまで努力されたのも、ますます看護研究を心理学の原点で進める必要性がある故であったとおもわれました。ご講演ならびにフロアからの熱心な発言ご苦労様でした。

(千葉大学名誉教授)

## 「これからの応用心理学」

藤田 圭一

記録によると、日本応用心理学会第1回大会は、終戦後の1946年(昭和21年)3月17日に日本大学を会場校として開催されている。以来1999年(平成11年)の第66回大会まで、じつに53年(第24回大会までは年に2度開催)の歴史を数えている。歴代の大会会長の御名前を拝見すると、いずれも日本の応用心理学だけでなく日本の心理学界をリードしてきた重鎮である。歴代の会長は、何を思い「応用心理学」会を主催なされたのだろう。

ところで、応用心理学が対象としている領域は、社会を構成しているさまざまな分野に及ぶ。社会の関心は人間の目標であり、それが応用心理学の目的である。応用は実践であり活用である。例えば、教育の領域において、教室で見せる教師と児童生徒との人間関係や、よりよい学習法の提案などの実践研究は応用である。そこには、少なくとも生きた人間の動きが見える。細分化され、実験室というフィールドで行われた研究を応用と結びつける手法は、それが人間研究の最新の成果であったとしても応用と

は言いがたい。

ここ20年間に学会が主催した「公開シンポジウム」のテーマを振り返ると、単なる話題性を取り上げているのではなく、具体的で緊急の解決を求められているテーマであることに気がつく。例えば、「家庭内暴力(1980)」「いじめの問題をめぐって(1985)」「交通安全教育(1990)」「宗教と癒し(1992)」「心のコントロールをめぐる諸問題(1995)」「最近の環境の変化と働く女性の行動(1997)」などは学会から社会への提言である。おそらく、シンポジストの諸氏は、理論を踏まえての実践報告と、さらなる応用理論の構築を主張したに違いない。シンポジウムに参加した会員と市民諸氏は、それぞれが所属する現場に持ち帰り、新たな活動に組み入れたはずである。まさに応用心理学そのものである。

日本応用心理学会は、応用心理学の母体であり、実践研究者の拠り所である。そうあらねばならない。ここ数年、若手研究者が多数入会していることは大変喜ばしいかぎりであるが、問題があるとすれば、それは日本心理学会のような有力学会のミニ版になってしまうことであろう。応用研究を社会が期待している以上、年次大会の研究発表や機関誌の論文には

独自性がある社会に還元できる内容を多く望みたい。また学会が受け皿となり、社会のいろいろな分野からの要請に応えられる体制づくりができないだろうか。例えば、応用心理学会との産学共同研究、教育における応用心理学的援助、環境問題に対する応用心理学的提言など、学会全体が進んで社会に門戸を広げ、「応用」心理学の存在感と使命を果たす

べき時ではないだろうか。応用心理士の充実もその一つであろう。「実践あふれる応用心理学」を目指して、応用心理学の再体系化、応用のための研究奨励、社会との連携、相互研鑽などの視点を考えていくべきかもしれない。

(城西大学女子短期大学部教授)

## 認定「応用心理士」事務局より

### 1) 認定「応用心理士」資格申請の手続きについて

認定「応用心理士」の資格を得ようとしていた会員の皆様、大変お待たせ致しました。新しい申請書類が出来上がりましたのでお届け致します。以前の申請書類よりは少し簡略化されましたので、書きやすくなったかと思えます。ぜひこの機会に申請の手続きをお取りくださいますようお願い申し上げます。

第66回大会(東京国際大学)の総会で承認されましたように、次回発行の会員名簿から、会員情報の欄に「応用心理士」認定番号が記載されることになりました。取得を希望されます会員の方は、なるべく早めに手続きをお取りくださいますようお願い申し上げます。

なお、平成11年度後期分の申請受付期間は過ぎましたが、申請書類の出来上がりが遅れましたので、今回は、平成12年1月末日まで受け付け致します。

申請にあたっては、「資格申請の手続き」の資格要件および申請手続きの項をよく読んで、手続きをしてください。

今回の申請受付分から申請書類が新しくなりまし

た。また、審査料の振込先も変更になりました。申請にあたっては、1999年12月発行のものをご使用ください。

### 2) 認定「応用心理士」の資格取得者の方へ

①「応用心理士」の仲間を一人でも増やしたいと思えます。日本応用心理学会の会員の中で「応用心理士」としての資質があると思われる方に、資格認定の手続きを取られるようお勧めいただきたくお願い申し上げます。

既に資格を取得されている方をお知りになりたい場合は、「資格申請の手続き」の巻末に登録者名簿を掲載しておりますので、ご参照ください。

②認定「応用心理士」の資格を所持されたことによって、職場などで役立っていること、承認を受けたことなどのケースを認定「応用心理士」事務局までお知らせください。「応用心理士」の価値をアピールしていきたいと思えます。

③認定「応用心理士」認定審査委員会では、「応用心理士」取得者に対する研修等の企画を検討してまいりましたが、新たに「研修委員会」が発足したのに伴い、これらの企画は研修委員会に委ねることになりました。(岡村一成：富士短期大学教授)

## お知らせ

### 新名誉会員

大島貞夫先生 中島弘之先生 山岡 淳先生

### 1999年度公開シンポジウム：テーマ「今、子どもたちの問題にいかに関わるか」

日 時：2000年1月29日(土) 14:00~16:30 会 場：駒澤大学 マルチメディア教場

### 2000年度大会日程

と き：2000年9月9日(土) 10日(日) ところ：神戸親和女子大学(神戸市北区鈴蘭台北町7-13-1)

今回日本応用心理学会ニュースレター——コミュニケーションの広場を創刊することとなりました。会員からのご意見をお寄せいただければ幸いです。

〒187-8587 東京都小平市小川町1-830

白梅学園短期大学心理学科

日本応用心理学会事務局広報委員会編集部